「サカサユメイゾナ」 ―努力を穢す禍

イゾナ科

危険度：★☆☆☆☆

生息数：★★★★☆

生態

額に巨大な血豆を作り、その中を泳ぎながら養分を摂取するイゾナ科の禍である。イゾナ科としては珍しく人間から離れてもしばらくは生存できる程度には身体が強い。恐らくはその生息域が皮一枚を挟んで外界にむき出しのため、なんらかの事故で憑いた人間から離れてしまった場合でも戻るだけの力が必要であったのだろうと思われる。しかし現在はそうした行動は見られず、取り出してしばらく放置すると死滅する。禍の進化の過程をよく表す種であると言えるだろう。

サカサユメイゾナは「努力したい」という感覚を摂取して成長する。通常人間はある程度その感覚を持っているが、この禍はその感覚を更に増長させる働きかけを行うのである。また実際に憑かれた人間が努力し、目的を達成してしまえばこの禍が摂取するものがなくなってしまうので、この禍は憑いた人間が実際には達成できないような不確かな目標を掲げるように誘導するのである。具体的には「今の自分は嫌だ」「努力していると自信がつく」といったネガティブな感情に合わせて分泌物を出し、努力したいという感覚を刺激する。こうすることによって本来「目的」に反応するはずである「努力したい」という感覚を、「逃避」に反応する感覚に変えてしまうのである。こうすれば一生達成することができないので、この禍の生存は安泰となる。

解説

努力とは人間のとる行動の中でも特に美しく、尊いものとして扱われる。それは大筋で正しいのであろうが、大きな例外も存在する。まず努力の良い点は充実感や達成感を与えてくれる点。次に努力によって技術が発達し、より多くの利益を生むことができるようになる点である。この両方について、それぞれ危険性が伴っている。まず充実感や達成感であるが、これは通常は不禍である。しかし他の禍によるストレスや苦しみからの逃避に使われる場合、その禍への対処を遅らせ、症状を悪化させるという不幸を生む。また技術の発達であるが、これも「社会的」な立場で見た場合には違ったものに見える。共通の利益をより増やすためには個人は際限なく努力することが望まれ、達成というものは邪魔でしかない。また社会的に不要と判断された努力は否定される。そういった社会的側面が思考を支配してしまった場合、努力とは利益を増やすだけのものとなり、サカサユメイゾナと同じく、一生達成することのできない、また自分本来の望みではない努力を良しとしてしまうのである。努力は素晴らしいものであるが、自分で素晴らしいと思う程度の素晴らしさが実際のところで、他人が言う「素晴らしい」とは、この社会的努力かまたはサカサユメイゾナに憑かれた人間の妄言と思ったほうが安全であろう。そこを錯覚するとサカサユメイゾナに憑かれる危険性が高まるのである。

対処法

とにかくまずは努力を逃げ道にしないことである。極端に言えば努力とは「娯楽」であり、なくても健康で健全な人間が更なる高みに上るための行動である。だから素晴らしい、美しいと言われるのであり、そうでないものは「素晴らしいかどうか分からない」という他の行動と同じラインまで戻して考える必要のあるものになる。ただし「全体の利益を高める」という効果は変わらずあるので、その目線で見れば逃避だろうがなんだろうが関係なく「素晴らしい」ものでもある。それは前述の社会的努力の危険性を考えた上で、良し悪しを判断してほしい。

努力は逃避、社会的と二つの要因で形の変わりやすいものであり、その形が変わってしまったことに気づきづらいものでもある。また前述のように他者の「努力というもの」への評価は当てにならない。本来の努力の形を良く覚えておいて、それに当てはまらないものはフラットな気持ちで判断するという意識を持ち続ければ、サカサユメイゾナに憑かれる可能性は極めて低くできる。